

リサイタルシリーズ"Profilo"

第2回「バッハ 若き日々～2つの写本から～」

《概要》

流尾真衣リサイタルシリーズ"Profilo"第2回「バッハ 若き日々 ～2つの写本から～」を開催します。シリーズタイトルである"Profilo"は、イタリア語で「横顔」の他、「輪郭」「視点」「人物評」などの意味を持つ言葉です。本シリーズでは、毎回ひとつのテーマを様々な視点から研究し、演奏を通じてひとつのストーリーとしてお届けすることをコンセプトとしています。

第2回目となる今回は、大作曲家バッハの若き日々をテーマとし、10歳で孤児となったバッハがその後いかに貪欲に多くのものを学び、音楽の腕を頼りに歩んでいったのか、その人生をたどります。

《目的・達成したい成果》

私が主に専門とする音楽は、何百年も前に文化も言語も全く異なるヨーロッパで生まれた作品ばかりです。それらが時を超え、国を越えて現代の日本にまで伝わり、今私が演奏できることに、日々深い感動と感謝の念を抱きます。これほどまでに素晴らしいと感じる作品に出合えたことは、先人たちの研究と演奏の歴史がもたらしてくれたものであり、かけがえのない財産だと感じています。私自身、このシリーズを通じて、より現代にフィットした形で研究・演奏を続けていきたいと思えます。

《将来の夢・今後の展望》

本シリーズでは、現在第10回目までのテーマを決定しており、少しずつではありますが準備を進めております。将来的には演奏会だけでなく、主に子供向けのワークショップや、分かりやすく本格的なコンサート、小オペラなど企画していきたいと考えております。なぜ子供向けかという日々我が子を育てている中で、大人たちが率先して心の豊かさを育むための機会と世界の広さを示していくことが大切と痛感しているためです。

流尾真衣（チェンバロ、オルガン）

東京都出身。4歳からピアノをはじめ、バッハの作品がきっかけとなり14歳からチェンバロを始める。東京藝術大学音楽学部古楽科に入学後は、ソロ演奏のほか声楽・器楽作品の通奏低音、ピアノでのオペラ・歌曲・合唱作品の伴奏に積極的に取り組む。同大学院修士課程在学中はG.フレスコバルディのトッカータと当時のマドリガーレとの関係について論文執筆するなど、言葉と音楽についての関わりを研究した。

現在はバロック音楽を軸としながら作品の時代・ジャンルにとらわれず活動を展開演劇・舞踊のほか近年では特に美術作品とのコラボレーションも多く、そごう美術館、神奈川県民ホールギャラリーにてJ.フェルメール、ウィリアム・モリス、大山エンリコイサムなど様々な時代の作品空間の中でコンサートを実施し好評を博した。また、0歳から聴けるバロックコンサートや学童期の子どもたちへのレッスンにも取り組む。2021年、ソロリサイタルシリーズ"Profilo"をスタート。チェンバロと通奏低音を鈴木雅明、上尾直毅、大塚直哉、平野智

美、Christine Schornsheim の各氏に師事。また、ニコラス・パール、グレン・ウィルソン、リナルド・アレッサンドリーニ各氏のマスタークラスを受講。オルガンを徳岡めぐみ、小島弥寧子、アンサンブルを鈴木秀美、若松夏美、福沢宏の各氏に師事。東京藝術大学より安宅賞、アカンサス音楽賞を受賞。在学中より現在までバッハ・コレギウム・ジャパンのコーラス練習伴奏者を務め、2022 年秋には声楽作品レコーディングに通奏低音参加。アルル音楽教室チェンバロ講師、アンサンブル室町メンバー、日本チェンバロ協会会員。